



週刊誌血風録

長尾三郎

| 著者 | 長尾三郎 ノンフィクション作家。1938年福島県生まれ。早稲田大学第一文学部演劇科中退。在学中から著述業に入り、政治、社会問題、スポーツなど幅広い分野で活躍、現在に至る。主な著書に『マッキンリーに死す』（第8回講談社ノンフィクション賞受賞）、『エベレストに死す』『サハラに死す』の“死す”三部作をはじめ、『虚構地獄 寺山修司』『人は50歳で何をなすべきか』（ともに講談社文庫）、『鎮魂』（徳間文庫）、『神宮の森の伝説』（文春文庫）、『激しすぎる夢』（山と溪谷社）、『忘己利他』（上下・講談社）などがある。

しゅうかん し けつふうろく
週刊誌血風録

なが お さぶろう
長尾三郎

© Saburo Nagao 2004



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2004年 12月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社書籍業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-274943-2

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

江苏工业学院图书馆

藏书章

週刊誌血風録

長尾三郎

講談社

週刊誌血風録

目次

プロローグ

13

第一部 『女性自身』は〈毎週が戦争〉

21

1 「これからはOLと呼ぼう」

22

2 週刊誌の“創刊ラッシュ”

39

3 「皇室を徹底的に売れ！」

49

4 全学連と演劇崩れ

61

5 三島由紀夫の声

69

第二部 わが青春の「黄金の日々」 79

1 吉展ちゃん事件の犯人を追え！ 80

2 アラン・ドロンの夜をキャッチせよ 99

3 「何でもあり」の青春群像 117

4 吉永小百合インタビュー 132

5 高見順の死と川端康成 144

6 ささらば『女性自身』

159

7 小奴といひし女の……

171

第三部 もう一つの〈週刊誌戦争〉

183

1 『俺は用心棒』の時代

184

2 テレビ界の風雲児

195

3 “トラベル戦争”の助っ人

206

4 革命幻想の旅のあとに

212

第四部 音羽の杜の〈血風録〉

223

1 三島由紀夫の自決

224

2 「ノリとハサミ」の特集号

237

3 「涙涸れて」——ミコとマコの物語

251

4 アンカー稼業の裏側

263

5 連合赤軍事件勃発

278

6 「あさま山荘」攻防戦

289

7 長嶋茂雄をクドいた女優

299

第五部 ノンフィクション作家への道

313

1 大場助教授殺人事件

314

2 「トップの座を奪回せよ！」

331

3 横井軍曹と小野田少尉

351

4 「日刊ゲンダイ」創刊秘話 366

5 変質した編集者魂 384

6 授賞式の詫び状 400

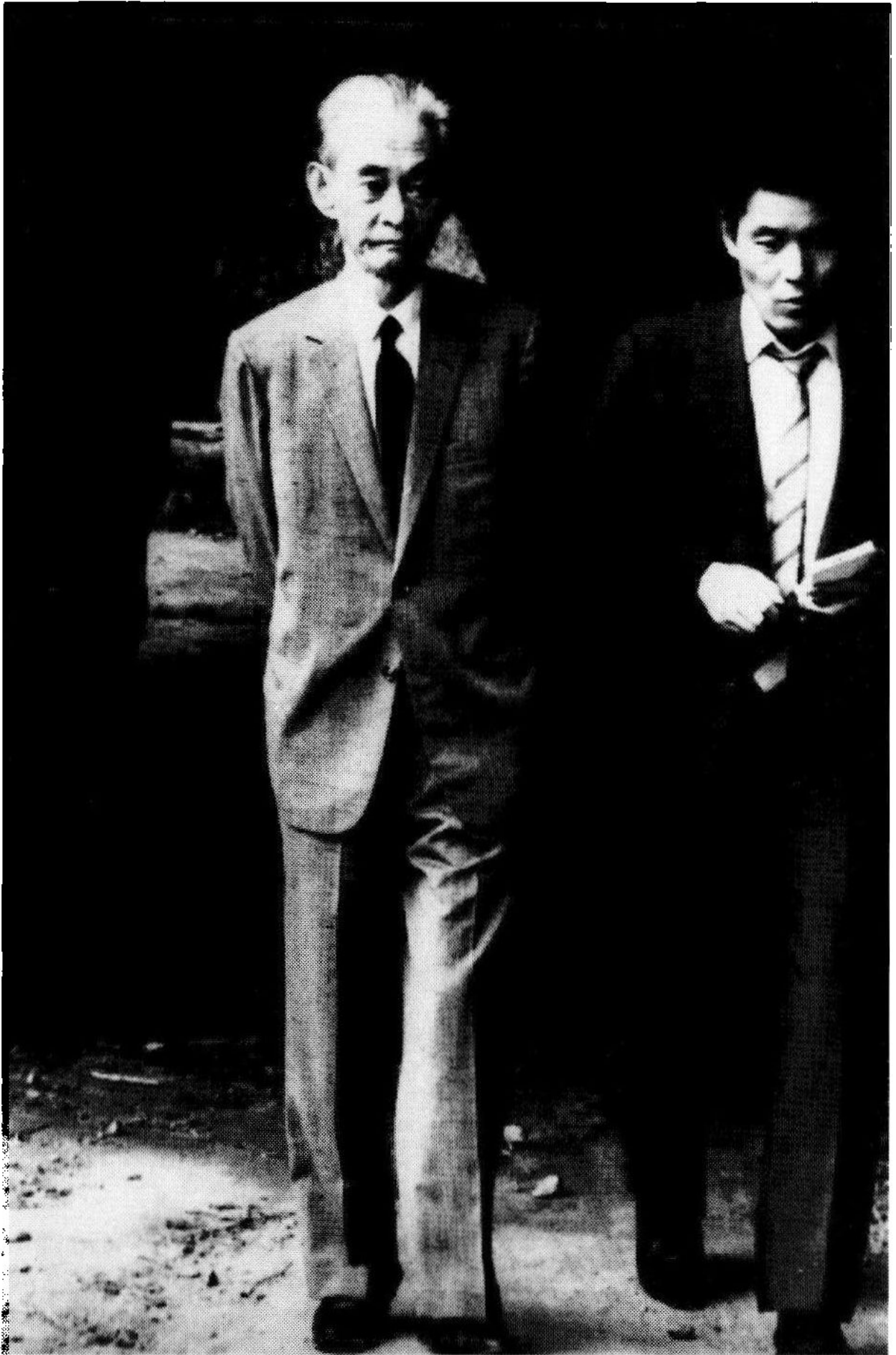
エピローグ 410

あとがき 417

引用・参考文献 419



昭和40年1月、長嶋茂雄・亜希子結婚披露宴取材で。新郎・新婦にはさまれた形の著者



昭和40年8月、北鎌倉で川端康成に取材する著者

プロローグ

「人間が一番興味をもつのは人間だ。人間を描け。取材に出たら、街のにおいや騒音を身につけて編集部に戻ってこい。『女性自身』は、あくまでも人間くさい人間ドラマにあふれた雑誌なんだ」

私が若い頃、取材記者をしていた『女性自身』（光文社）の黒崎勇・創刊編集長は、いつもこう檄（げき）を飛ばしていた。黒崎はまたカメラマンにこういった。「山本富士子がトイレに入っているところを撮ってこい」。山本富士子は当時、人気絶頂のスターだった。これはもちろん比喻で、プロマイドみたいな写真を撮ってくるな、超有名女優の人間くさい素顔を提供するの、ニュー・ジャーナリズムとしての週刊誌の使命だ、という考えが黒崎の心底にあったものと思われる。

また、『女性自身』の櫻井秀勲・三代目編集長は「オヤ、マア、ヘエ」という記事を書け、と私たちを厳しく教育した。つまり、読者を、「オヤ」と驚かせ、「マア」とおもしろがらせ、「ヘエ」と感心させる記事でなければ、読者の共感呼ばない。櫻井編集長はこれを「三種の神器」といった。ちなみに、冒頭はまず『話し言葉』ないしは『会話』から入れ、

説明的な地の文などはダメだ、それが一瞬にして読者を文中に引き込むコツだ、とも教えられた。これは吉川英治が『神州天馬俠』で使った手法だという。

出版社系週刊誌のトップをきって『週刊新潮』（新潮社）が創刊されたのが昭和三十一年（一九五六）年。その成功は各出版社を刺激して、大手出版社から次々と週刊誌が創刊されて、いわゆるニュー・メディアとしての『週刊誌ブーム』が到来する。時あたかも皇太子（現天皇）の婚礼があつた昭和三十四年前後のことで、『世紀の御成婚』『ミッチー・ブーム』と共に訪れた『テレビ時代』と『週刊誌の時代』の幕あけであつた。

私が学生時代から深くかかわるようになった『女性自身』の創刊は昭和三十三年、『週刊現代』（講談社）が三十四年、『ヤングレディ』（講談社）は三十八年。早稲田大学文学部演劇科を三年で中退して、昭和三十六年に『女性自身』の取材記者として働き始めて以来、ほぼ週刊誌創成期からその歴史とともに毎週走ってきた私の『週刊誌生活』は、したがって四十年以上におよぶことになる。

その間、私は前出の『女性自身』『週刊現代』『ヤングレディ』の三誌だけではなく、『週刊サンケイ』（産経新聞社）や写真週刊誌の『フライデー』（講談社）、あるいは今は存在しない『潮流ジャーナル』（恒文社）や幻の週刊誌と化した『週刊河出』（河出書房新社）など十指に近い週刊誌で、取材記者やアンカーとしてかかわってきた。『アエラ』（朝日新聞社）が創刊したときも、『現代の肖像』の執筆者として名をつらねている。つまり私の人生は

『週刊誌人生』に他ならない。

「週刊誌は既成のマスコミ批判から出発している」

とは、私の長年の友人で、『週刊現代』や『フライデー』で編集長をつとめた元木昌彦氏の言葉だが、その言を俟^まつまでもなく、出版社系週刊誌が創刊された当時の日本のマスコミ状況は、たとえば新聞は朝日新聞、テレビはNHK、書籍は岩波書店、大衆雑誌は講談社という具合で、そうした「お上品」なメディアが、いわゆる一般大衆のニーズを全面的にカバーできる状況にあつたかといえ、必ずしもそうではなかった。

人間にはオモテとウラ、タテマエとホンネがあるように、ウラの部分、ホンネの部分にこそ興味を抱いている層が確かに存在していたし、そこに〈新しい定期刊行物の読者〉を見すえて創刊され、そして新しいメディアとして成功したのが週刊誌というジャンルだったと思う。

したがって、創刊当初の週刊誌の三大柱は「3S」（セックス、スキャンダル、センセーショナルリズム）といわれたことも事実だし、実際、『週刊現代』の牧野武朗・四代目編集長は「カネ、オンナ、出世」という三つの言葉に凝縮された人間の「欲望路線」に徹して部数を飛躍的に伸ばした。

また、週刊誌は「ゲリラ・ジャーナリズム」だといわれた時期もある。これは既成メディアがいわば冷笑的なニュアンスをこめて評した言葉だが、しかし私は逆にこれは褒め言葉で